

Library News

March, 1980

滋賀医科大学附属図書館報

目	次
図書館長を去るにあたって	1
オンライン検索1年余をふり返って	2
シリーズ「図書館に望む」(3), (4)	4
Telex で文献入手期間は半減	5
シリーズ 文献調査のために(1)	6
“滋賀医大に古医書寄附”	8
図書館の活動(54. 11 ~ 55. 2)	8

図書館長を去るにあたって

前附属図書館長 野崎 光 洋

図書館と共に過した5年余り(図書委員長として1年半, 図書館長として4年), ずぶの素人が医科大学図書館を新設するという重い責任を負わされ, 四苦八苦しながらも勤められたのは, 学長始め教職員皆様の御理解, 御協力の賜と深く感謝致しております。

想い越せば守山の仮校舎の一室(約100㎡)で, 3,000冊程度の書籍とともに図書館がスタートしたのが昭和49年10月1日。当時, 図書館の基本構想, 運営, 選書はもとより, 大学設置基準の専門書30,000冊の達成, 図書館建築の設計等解決しなければならない問題が山積されておりました。

基本構想, 運営に関しましてはすでにLibrary News No.1で紹介しましたが, 委員会での協議のもとに, 変りつゝある情報化時代にそくした開かれた図書館と, 利用者中心の運営をモットーに進めてきました。選書に関しましては発令予定者を含めた全員によるアンケート調査の結果を尊重するとともに, 講座, 学科間のバランス, 医科大学図書館として欠くことのできない基本図書, 雑誌を考慮しつつ, 委員会に於て慎重に討議を重ねて決定してきました。

一番の難題は大学院設置基準の達成で, 30,000といえは当時の予算額からして自然増のみでは10年にかかる冊数でした。これを大学院設置までに集めよとの至上命令と, “冊数”か“実質”かの板ばさみに悩まされながらも, 貴重な予算はあくまで有効に利用するとの原則をたてました。冊数増に関しては関係各方面へ呼びかけ寄贈本集めに奔走した結果, 10,000余冊の寄贈を受け, その後, 設備充実費の学内配分により, 過去10年間のバックナンバーを揃えるとともに, 今年度でようやく待望の基準を達成することができました。この紙上をお借りして, 御協力いただきました諸氏, 諸機関に厚く御礼申し上げます。

建築設計に関しましても慎重にならざるを得ませんでした。既存図書館の見学、図書館設計の専門書を参考に、施設課の御協力を得て、明るくかつ機能的な図書館を目標に設計を進め、周知の通り、昨年3月待望の図書館が竣工しました。(Library News No.2 参照)

竣工を機会に独立した図書館として対外的な活動も活発になった矢先、原課長の御不幸も重なり、きびしい時期もありましたが、職員の協力のもとに何とか乗り越え、発足以来の種々の問題に一応の区切をつけることができました。しかし、大学院設置、資料の充実、変りつつある学術情報システムへの対応等今後に残された問題も多々あります。次期館長尾崎教授を中心に増々発展されることを切に希望しております。館長を去るにあたり、有能な図書館職員に支えられ、一応の責を果たした満足感と、御理解、御支援をいただいた学内外の皆様への感謝の念で一ぱいです。教室員にも多々迷惑をかけてきましたが、今後は教育、研究に専念したいと思っております。

オンライン検索1年余をふり返って

当館では、53年10月から日本科学技術情報センターのJOISによるオンライン情報検索サービスを開始し、また、54年2月末からは筑波大学学術情報処理センターのシステムIDEAS/77を利用してきました。

検索の形態はRS=遡及検索とSDI検索です。

これらシステムの導入以前から、オンライン情報検索をこれからの図書館の重要なサービス部門として位置づけ、職員の研修、参考資料の収集、関係機関との連絡、学内での宣伝活動等に取り組んできました。

開始から1年余を経過した今、利用実態を以下のようにまとめましたので、ご報告します。

「オンライン情報検索月別件数」(53・11～54・12)(図-1)によりますと、53年度(5ヵ月間)の月間平均件数は42件、54年度(9ヵ月間)は51件となります。この件数は公衆回線を利用している大学図書館では全国でも一番多いと思われます。1回当りの所要時間は利用者との事前インタビューも含めて平均30～40分、実際の検索時間は5～7分要しております。

利用者を専門課程教官(医員等を含む)のみ

で「所属別」と「目的別」に分けると(図-2)基礎4:臨床6で臨床の方が上まわっています。これは一つには臨床系の人数が多いことにもよると考えられます。又、利用目的では、研究が半分弱、論文作成:22%,学会発表:17%,臨床検討:10%,総説作成:5%となっております。論文作成と学会発表とは必ずしも厳密に区分できないとしても、大体の傾向がつかめるのではないのでしょうか。

オンライン検索を利用した多くの方から「今まで何かを調べるのにIndex Medicusをあちこち引きながら1日がかかりでしていたのをわずかな時間でできるようになり、大変助かっている」ということをよく聞きます。研究活動に少しでも役に立てばと念じている次第です。

さて、今後の展望・抱負ですが、「臨床検討」が10%みられますが、実際はもっと診療面に寄与できるのではないのでしょうか。例えば、最近アメリカではCML(Clinical Medical Librarian-臨床医学司書)というのがおり、「臨床に直接携わるスタッフに図書館資料をより効果的に活用してもらうため、司書が図書館で利用者からの依頼をただ待つばかりでなく、利用者の方

図-1

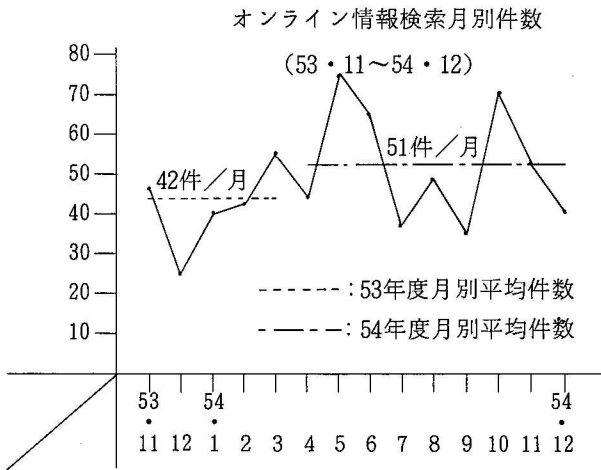
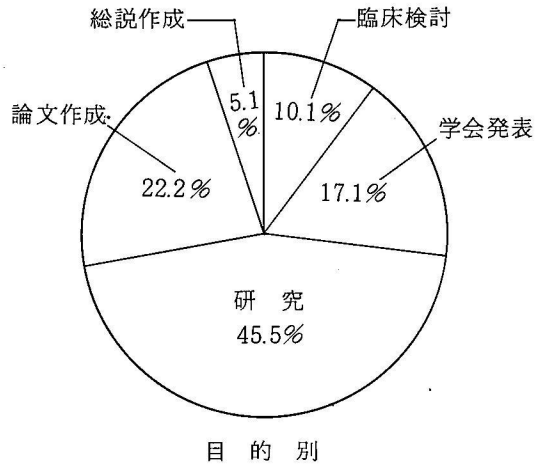


図-2

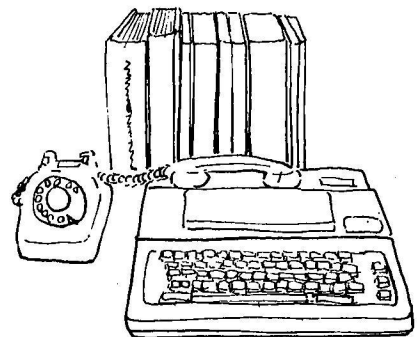
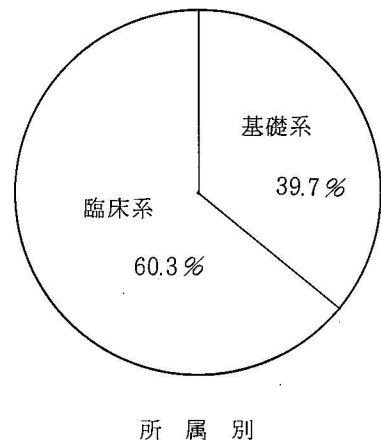
目的別・所属別JOIS遡及検索
 申込件数の比率 (1979年)



へ積極的に入り込み、臨床の現場にいるスタッフたちがどのような情報を必要としているかを認識し、それに合う情報を迅速に提供しようという」(足立純子, 「クリニカル・メディカル・ライブラリアンの動向」, 病院 38 (12) P. 105, '79) 活動を行なっております。勿論、日本とアメリカとではいろいろな事情が異なりますから、CMLのようなことをすぐ行なおうというわけではありません。しかし、10%以上にもっと臨床——診療面でも活用していただけるのではないかと期待しています。

情報検索についても日進月歩し、近い将来には Lockheed-DIALOG が ICAS (International Computer Access Service) を通じて利用できるようになると、約100のデータベースが直接アメリカと交信しながら、しかも低料金で利用できるようになります。又、JOISについても56年1月からはJOIS II となり、遡及年限をはじめ、現在より相当レベルアップされる予定です。

今後とも研究・臨床面はもとより、多方面に有効にご利用くださるようお待ちしております。



シリーズ「図書館に望む」

(3) 教官〔臨床医学〕

第3内科学講座講師 原 納 優

私達臨床に籍をおく者が図書館を訪れるときは、1) 研究に際し先人の業績を知り、自己の得た知見がいかなる位置を占めた新しいものであるか、スリルとともに最新の文献を当たるとき、2) 抄読会やセミナーのために新旧の文献を引用するとき、3) 珍しい或いは診断、治療に困難を感じた症例を経験した場合、過去の症例報告や成書を読むとき、4) 講義や教材用として文献、著書、ビデオなどの閲覧、5) 静かな雰囲気が必要で頭を冷したいときや、原稿の期日がせまったときなどである。従ってまず閲覧室はゆったりとして快適であって欲しい。机の配置も教室のようでなく、また冷暖房も完備して欲しい。コンピューターによる文献検索やビデオなど優秀な機器に感心している次第であり、時間があればもっと利用させて貰いたいと思っている。

今までは日本でみる雑誌は欧米に比し1-2ヶ月遅れていた。最近 air cargo で送られてくる場合があるそうであるが、重要文献は air でできるだけ早く入れて戴きたい。また日本の欧文誌も外国へ紹介するなど育てて欲しい(私達の関係では Endocrinologia Japonica, J. Biochemistry, Biomed. Res. など)。最近雑誌の種類も増え、Back Number も増加予定とのこと、各科の希望も反映され、職員、バイト学生諸氏も親切で気持よく利用でき喜んでいます。今後も新しい雑誌、成書類を職員、学生の希望により十分入れて戴きたい。

私達が論文を書く時間ができるのは多くの場合時間外か休暇中である。本学では8時まで開

館しているので有難く思っているが、冬期の休館、製本のための期間をできるだけ短くして欲しい。米国の経験では、医学部の図書館は夜12時まで、日曜、祭日も半日はオープンであった。しかも学生、職員の利用度も大であり、一方期限切れ借出しには1日5-10セントの罰金を取られたように思うが…。東京、大阪、京都などの大都会にくらべると、セミナーや国際交流の機会が少い傾向にあるところとくに図書館の情報源としての占める役割は大であり、研究、教育、診療に重要な役割を演じている。昨年行われた医学書展示会などももっと充実して、年2回程行って欲しい。いずれにしても図書館は私達にとり必須であり、そこを訪れれば何かを得られる存在である。

(4) パラメディカル部門〔看護部〕

教育委員 元 森 淳 子

昨年図書館が開館し、私達の要望する看護関係の図書を順次購入して頂き、喜んでおります。

此の度、「図書館に望む、と言うテーマで意見を…」と、依頼を受けましたが、看護関係の図書は看護部に移管されておりますので、この現状を元に少々気付いた事を申し述べます。

私達の勤務は三交代制で、しかもその内容はスケジュールにそって刻々と、或は患者さんの病状によって即刻対処しなければならない事が多く、自由に職場を離れる事は困難であります。又私達はしばしば急に文献を必要とします。以上の事情から、私達の方でお願いして、看護関係の図書は看護部へ移管と言う措置をとって頂きました。これは利用しやすいと言う点で良かったと思っておりますが、残念な事には十分に

生かされておられません。その主たる理由はPR不足と、保管場所に依ると考えられます。看護部に移管されたからには、私達に責任があると反省しておりますが、看護部には看護管理業務があるので所詮図書館の分室的役割をのぞむのは無理です。保管場所、借し出し方法等については、この機会に再検討したいと思っておりますが、PRについては協力して頂けると幸いです。例えば看護部に移管された蔵書のリストを作って頂く。随時購入された図書については勿論私達で追記します。

又、ライブラリー・ニュースNo.3に、第二生理、西尾先生がお書きになっていることと同じですが、図書館利用のパンフレットを作って頂いたり、新規購入図書の案内や紹介をして頂くと、図書館ももっと身近かに感じられるのではないのでしょうか。

視聴覚室の利用についてもしかり。もっと末端にとどく方法でPRして頂きたいと思います。

以上、教育委員の一人として私見を述べさせて頂きました。

Telexで文献入手期間は半減

当館では、昨年4月にTelexを導入し、学外の図書館からの文献入手期間の短縮を図ってきました。また同様に昨年4月から、国立大学・高専図書館間の文献複写にかかわる事務手続の抜本的な改善がおこなわれ、これにより、校費・私費を問わず文献複写の入手に要する期間が短縮されました。

以下に、昭和53年度と昭和54年度における文献複写の申込から入手までの平均日数を表にして比較してみました。

〔文献複写入手期間（平均日数）の比較〕

申込方法	申込先	昭和53年度	昭和54年度
Telex	国・公・私を問わず		5.9 日
郵送	対国立	校費	(新方式移行) 9.5 日
		私費	
	対公・私立	10.8 日	7.5 日
平均		14.8 日	7.6 日

この表からもわかるように、昭和54年度においては、文献複写の入手に要する日数は、全体として、従来の半分に短縮されました。ここにTelex導入と国立大学・高専図書館の文献複写事務手続簡素化の効果がはっきりと現われています。

もう少し詳しく説明しますと、申込にあたっては、申込先としてまず第一にTelex設置館を優先します。その件数は全体の70%を占めています。これはTelexを設置している図書館に共通にみられる傾向です。その結果、Telex設置館相互に申込が集中し、昭和53年度においては、医学図書館協会加盟館が他館へ文献複写を提供した件数のうち55%をTelex設置館（加盟館全体の22%）で処理しているという現象が起きています。このあたりに、Telexで文献複写を申込んでも、複写物の入手までに

なお6日かかるという理由があるようです（複写物は郵送）。しかし従来の郵便による申込では、入手までに平均して10日～3週間かかっていたものが、約半分の6日以下で入手できるようになったことの意味は大きいと思います。

なお、従来通りの郵送による方法で公・私立大学の図書館へ申込んだ場合の所要日数が昭和53年度の10.8日から昭和54年度の7.5日へと短くなっていますが、これは54年度に入り、申込先の大部分が対Telex設置館となり、残ったTelex未設置館に対して申込む場合も近畿地区内の比較的サービスの速い図書館を優先して選んでいるためと思われます。

今後とも一日でも速く文献が入手できるよう努力していく所存です。

シリーズ 文献調査のために — 索引・抄録誌紹介 —

何かについて調べたり研究しようとするとき、過去の研究成果を踏まえて、新しい知見を求めることが必要である。とくにテーマの決定や一度決定したテーマについて研究を始めようとする場合には、徹底的な文献調査が要求される。それによって、これまでに何が明らかにされ、何が解明されていないか、誰がどういう研究をしているかが明らかになり、研究の無駄な重複をはぶくことができるからである。

このシリーズでは、マニュアル（手作業）による文献調査のために、当館に所蔵する索引・抄録誌について説明を簡単に行なっていきたい。

使い方等の詳細については、カウンターでおたずね下さい。

〔1〕 INDEX MEDICUS

— 最も代表的で使いやすい世界の 医学文献の索引誌 —

Index Medicus (IM) は アメリカの National Library of Medicine (NLM) によって毎月編集・発行される、世界の医学文献の、最大の索引誌である。1年経過すれば年間累積版である Cumulated Index Medicus (CIM) も発行される。

IMは昨年(1979)、100年の歴史をむかえた。IMは1879年の創刊以来、名称・発行母体・索引法も含めて、幾度かの変遷を経ているが、

今日のIMは、1960年に始まるものである。

1. 収録範囲

1) 分野——医学全領域

2) 文献タイプ

①雑誌——世界で発行される約2,300の医学及び関連分野の雑誌の原著論文、総説論文、ケースレポートはもちろん、レター論説、伝記、死亡記事等で実質的な内容のあるもの。(抄録は索引されない。)

②単行本——学会やシンポジウム等の刊行された会議録 (proceedings) および多数の著者の著作をあつめた本の中の個々の論文又は章。

3) 国・言語——74カ国・41言語。

2. 構成

1) Bibliography of Medical Reviews——

I M当該号にリストされた文献のうち、最近の医学文献をレビューした論文のみを抜き出してリストしたもの。

2) Subject Section——主題を表わす見出語 (後述のMeSH より選ばれた用語)のもとに文献のレファレンスがリストされている。

3) Author Section —— I Mに掲載された文献のすべての著書のアルファベット順リスト。完全な文献レファレンスは第1著者のもとにのみ現われ、第2以下の著者からは第1著者への参照のみ。“Z”のあとは、英語以外の言語の無著者名の文献のリスト。

3. Medical Subject Headings (MeSH)

I Mを利用する場合、必ず参照しなければならない索引・検索用語集。毎年、用語を追加、削除したうえ、I M1月号のPart2として刊行される。

1) Alphabetic List——I Mの非見出語から見出語への参照も含め、用語がアルファベット順にリストされている。I Mの見出語となる各用語には、“tree number”とよばれるカテゴリー・ナンバーがついており、そのナンバーを手がかりに、次に述べるTree Structuresにおけるその用語の位置を知ることができる。

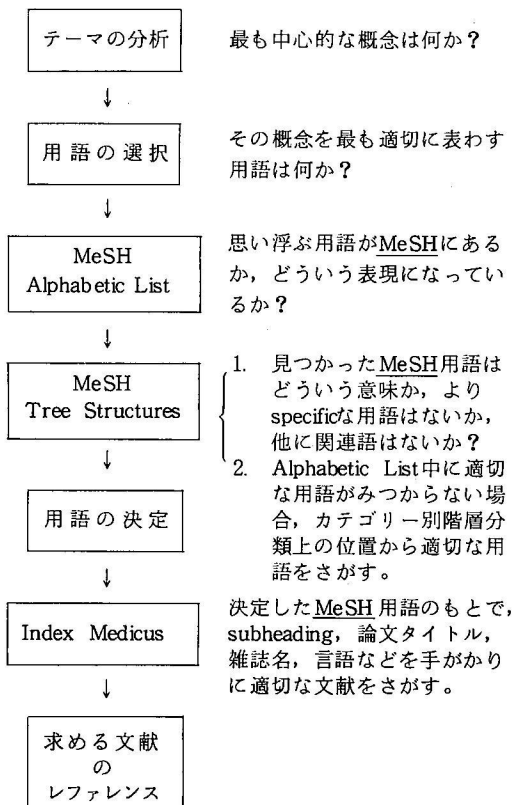
2) Tree Structures——MeSHのすべての用語をその概念の上下関係によってカテ

リー別に樹状 (階層) 構造に配列している。

利用者は、このTree Structures によってMeSH用語の意味 (分類上の位置) やより特定 (specific) な用語はないか、他に関連の用語はないかを知ることができる。

I Mでは、文献はそのテーマの最も重要な概念 (複数) を表わす最も特定 (specific) な用語で索引されている (例、erythromycinを扱った文献であれば、それより広い“ANTIBIOTICS”のもとでなく、“ERYTHROMYCIN”のもとに索引される) ので、I Mにより文献を探す場合も、まずそのテーマの最も中心的な概念を表わす最も特定 (specific) な用語をMeSHより選び、その用語のもとを見なければならぬ。

最後に、Index Medicusで文献をさがす場合の手順を図示する。



彦根市 河村 純一
滋賀医大に古医書寄附

寄附をきめて父祖の著書のさまざまの
堆かき中に坐り安らぐ

手にとりて古書をめくれば紙魚一つ
現はれてすぐ見えなくなり

堆かき古書の山より勾ひ立つ

微くさき中に坐りてゐたり

納戸より古書を縁先に運びゐる

娘感傷の言を言ふなし

文字の上に朱点打ちしは何時の祖か

想ひつづけず本を閉ぢたり

手広かりし発行書肆の日本橋

須原屋茂兵衛の後は如何にや

積み終へて古書の埃りにはたらきし

図書館員ら手を洗ひをり

わが家の古書を積みたるトラックが
角曲るまで見送りてゐき

(注) 「滋賀県医師協同組合ニュース」8巻65号(昭和53年12月25日)収載。河村純一先生及び同協同組合の許可を得て転載。

図書館の活動 (54・11~55・2)

- 54・11・6~7 読書週間記念医学書展示会
11・21 図書館委員会
12・3 近畿地区医学図書館協議会(阪医大)
55・1・23 教授会(次期図書館長に尾崎教授(微生物)を選出,任期-3月1日から2カ年)
1・28 図書館業務機械化委員会(神戸大)
2・1 国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会(国会図書館)
2・4 持廻り図書館委員会
2・21 図書館委員会
2・25 図書館業務機械化委員会(京大)